

学位授与番号	医博乙第1140号
学位授与年月日	平成3年10月16日
氏名	中村 隆
学位論文題目	肝内細菌感染と慢性増殖性胆管炎に関する実験的検討

論文審査委員	主査教授	宮崎逸夫
	副査教授	中村信一
	教授	小林健一

## 内容の要旨および審査の結果の要旨

肝内結石の成因として胆汁鬱滞と胆道感染の関与が推察されている。しかし、この胆道感染が肝内胆管枝に及ぼす影響についての病理組織学的な研究は少なく、胆道感染の中でも特に嫌気性菌による肝内胆管枝障害について検討した報告は全くない。

そこで本研究では、胆道感染が肝内胆管枝に及ぼす影響、特に嫌気性菌の病的役割を知ることを目的として、雑種成犬の部分肝に胆汁鬱滞を作製し、これに好気性菌と嫌気性菌の両者を注入感染させたモデル犬（混合感染群）と、好気性菌のみを注入感染させたモデル犬（単独感染群）を作製し、両群にいかなる病理組織学的相違があるかを検討した結果、以下の成績を得た。

1. *E. coli*と*B. fragilis*との混合感染群では、大型胆管領域において、胆管壁および門脈壁の著明な線維性肥厚とリンパ球を主体とした炎症細胞浸潤などの慢性炎症所見が高度であった。また、胆管上皮の著明な乳頭状増殖や胆管壁内粘液腺の増生およびそれら細胞質内の豊富な粘液貯留などの増殖性変化が顕著であり、これらの所見はヒト肝内結石症で高率に見られる慢性増殖性胆管炎の組織像と極めて類似していた。この胆管上皮の過形成巣部でのLabeling Indexは $21.5 \pm 2.2\%$ と高値を示した。なお、混合感染群7頭中1頭にビリルビンカルシウムを95%以上含有する結石の形成が認められ、組織学的にも粘液と絡まる様にビリルビンの析出した像が確認された。
2. *E. coli*のみの好気性菌単独感染群では、大型胆管領域において、胆管壁および門脈壁の著明な線維性肥厚と炎症細胞浸潤などの慢性炎症所見は、混合感染群と同様に高度であった。しかし、胆管上皮は極く軽度の乳頭状増殖を示すのみで胆管壁内粘液腺の形成も認められず細胞質内粘液量も少なく、増殖性変化は混合感染群に比べ極めて軽微であった。この胆管上皮のLabeling Indexは $4.3 \pm 1.4\%$ であり混合感染群に比し有意( $P < 0.01$ )に低値であった。

以上の成績より、肝内の大型胆管枝に見られる胆管上皮の増殖性変化、特に粘液腺の増生には、嫌気性菌感染が大きく関与していることが示唆された。

本研究は難病とされる肝内結石の成因の1部を明らかにした上で、胆道外科学上有益な労作と評価された。